

齊 藤 勇 さ ん (明 治 36 年 生)



明治38年、両親は山形県から船で小樽へ上陸し、汽車で二泊しながら滝川で乗り換え、旅客車はないので工事用の屋根なし貨車に乗ってふるえながら落合に着いたそうです。当時狩勝線工事の真只中でしたので、父親は屋根葺き職人でしたから、その腕を利用して、飯場建築作業で一か年程過ごしたそうです。大変良い収入はあったそうですが、土工夫たちは毎夜のように、酒を飲んで、喧嘩、口論で、その度ごとに父は呼ばれて仲裁したものだそうです。生活が余りにも荒っぽいので、母は、子供への影響を考がえ、父を強く説得して旧石狩国道を通り、日高山脈を徒歩で越え現地に開拓に入ったのです。その後ある日持っていた金が時計と土地一戸分とを交換するなどして、文字通り苦勞に苦勞を重ねながら土地を増やしたのです。これは母の晩年の物語りです。苦勞といえば、日用品、食糧を買い求めることは、大層難儀したものだそうです。母は朝3時に起きて、雑穀を一俵背負い、現在の畜試の山沿いの道、石狩道路落合トマムまで日高山脈を越え、3里半の道程を歩いて行ったものだそうです。トマムで一休みし、日用品と白米一俵背負い家まで日帰りしたものだそうです。夏の日でも家に着く頃は暗くなっていた。とにかく、足腰の丈夫な母でした。その影響でしょうか、後に私も新得に乾精米所がありましたが、14歳で玄米一俵背負い精米所までゆき、待っていて、精米済みの米を背負って帰りました。特に重いとも思いませんでしたね。母親の遺伝ですかね。水田耕作の盛んになったのは、大正に入ってからだと思います。必要な用水確保のため灌漑溝を堀削することになり、部落の人々の負担金のこと、役場との折衝などに父親は走り回っていたようです。しばらくしてたくさんの土工夫が私の家の近くに飯場を建て作業を始めました。11月の雪の降る中でも布子一枚着て作業していたね。それで出来たのが、現在7号道路北側にみられる低い溝跡が当時の水田用水路なのです。7号道路南側の平らな土地は全部水田でした。私の親達の元気な頃の部落戸数は120戸程といわれ、新区画、現在でいうならば広内鉄橋方面には80戸位と聞いていますが詳しくは分かりません。広内方面には開拓の最盛期には相当戸数あり、小学校も在ったのです。もちろん分校ですが、ですから青年団活動も盛んでした。この方面は秋田団体が主力であったようです。

